

広島大学学術情報リポジトリ

Hiroshima University Institutional Repository

Title	「どこの馬の骨か」の比喩表現考察：韓国「개뼈디귀（犬の骨）」の表現と比較して
Author(s)	朴, 鐘培
Citation	日本語・日本文化研修プログラム研修レポート集, 1990 : 131 - 146
Issue Date	1991-03-01
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00039291
Right	
Relation	



「どこの馬の骨か」の 比喩表現考察

— 韓国語の「거뼘다귀(犬の骨)」の表現と比較して —

朴 鍾 培

I. 序 言

我々の生活にとって、基本的必需品を社会学者は「食うもの、着るもの、雨露をしのぐ物」として要約している。第一のものが根幹で、後の二つは付随的である。南海の天国のような島では、事実、後の二つは無しでも済まされようが、人間はどこにいても食べ物無しでは生活しえない。

恐らく、食べることは人間の行為の中で、高貴とは言えないまでも、最も古い営みであろう。それで、食べ物と言葉との関わりは、ごく古い時期にすでにあつたに違いない。

現在記録に残っているもっとも古い料理本は、約四千七百年前の中国（広東料理）の物である。中国人は料理に優れていると同時に、優れた詩人であり、鳩の卵のスープを「銀の海に浮かぶ黄色の月」と呼び、鱻(ふか)のひれと卵の料理には「雲を貫く一万本の矢」の名称を与えたというから、食べ物が言葉の成長にいかに関わりを持っているものであるかが分かる。

日本人が日常用いている言葉の中にも、食べ物に関連したものが、少なくないようだ。あらゆる場合に用いられる「味が無い」とか「味気ない世の中」などという言葉も、無論食べ物から来ているが、不満足という意味を表す「食い足りない」、理解と理解力の良さをあらわす「呑み込んだ・呑み込みが早い」、納得がいかないときの「腑に落ちない」、満員の電車に「すし詰め」にされる、節度を守るべき事を教える「腹も身のうち」、忘却・忘恩を意味する「喉もと過ぎれば熱さを忘れる」等という言葉も、いずれも、食べ物から来ている。

韓国語の場合も食べ物から成り立っている言葉が多い。日本の「山椒(さんしょう)は小粒でもぴりりと辛い」という諺は、韓国では「작은 고추가 맵다(小さい唐辛子が辛い)」といい、「赤とんぼ」は「고추 집자리(唐辛子とんぼ)」と言う。そして、男の子のあそこを「고추(とうがらし)」と言う愛称で呼んでいる。

日頃私達が何気なく使っている日常の言葉の中にも食べ物にその根をおろしているのがこんなに多いのである。食生活(食文化)と言葉がそういう密着性を持っているだけに、ふだん我々は気付かずに使っているのである。喋る前にそれを考える人もいないだろうし、気付かなくて問題になる性質のものでもない。なぜなら、同じ文化の中で生まれ育って、慣れてきた人同士では、その言葉の意味が十分通じるからであろう。

(2)

韓国と日本は、同じ東洋文化圏の国で、中国からの漢字をはじめ、仏教、儒教などのいろんな文化を共有する時期が多かった。言葉においても、両方共に漢字を使っているし、語順もほぼ変わらないと言われている。それだけに、両国語において似たような表現が多いのである。反面、大変似ているようでも発想とかイメージが違うものもあるし、まったく違っていて翻訳しようとしても適当な言葉が見つからない場合も多い。

どういう面が似ていてどういう面が異なるか。それはなぜだろうか。その裏にはどんな影響力が作用しているのか。また、その影響力が両国の伝統的な文化の背景にあるのならどういう共通性と相違性があるのかについて具体的に調査・分析してみるのも大変意義深いことだと思う。

そういう文化の差を良く反映している言葉は色々あるが、慣用的比喩表現もその一つであろう。ここでは、日本語の「どこの馬の骨か」という表現と、韓国語の「어디서 끌려온 개뼈다귀냐」という比喩表現を比較して見ることにする。同時にほぼ同じような場合に比喩されるのに、どうして日本では馬、韓国では犬が利用されたのであろう。なぜ、動物の「馬・犬」にたとえたのだろうか。馬と犬に対して私達はどのようなイメージを持っているのか、等について述べていくことにする。

II. 本論

一、「馬の骨」・「어디서 끌려온 개뼈다귀냐 (どこから転んできた犬の骨か)」
次は、志賀直哉の小説『和解』(p 51～p 52)から引用した文である。

然し自分からそれを云い出す気は少しもなかった。のみならず東京に葬りたいという考も其所へ葬って貰いたい気で云っていたのではなかった。自分はTさんに二坪或いは三坪位の墓地を青山に買って貰う事と、翌日其所に葬る手続きと、用意と、それから、馬の骨のような坊主に経を読んで貰う代わりに赤坂の叔父の先生の建長寺の館長さんに戒名をつけて貰う事とその日鎌倉でお経を上げて置いて貰う事とを頼んだ。

上の「馬の骨のような坊主」は次の「赤坂の叔父の先生の建長寺の館長さん」に対比された比喩表現である。どこで何をしていたかも知れない坊主に対し、館長は具体的にどういふ人なのかが表現されている。

上の「馬の骨」という比喩表現を韓国語に直訳すれば多分可笑しくなるだろう。この表現と似ている韓国語で、「개뼈다귀 (犬の骨)」というのがある。これは「どこで何をしていたどういう者か分からない人が急に現われたとき、あざけつていう言葉」である。実際には「어디서 끌려온 개뼈다귀냐 (どこから転んで来た犬の骨か!)」という。それは日本語の「馬の骨」と大変似ている。それは次の文献を見てもよく分かる。

- 1) 馬の骨～素性の分からない下賤の者をあざけていう語。『日本国語大辞典』小学館
- 2) どこの馬の骨～素性の知れない者を罵っていう語。『日本国語大辞典』小学館
- 3) どこの馬の骨～どこの生まれ。
馬の骨のような卑しい生まれの者のたとえ。『慣用句辞典』
- 4) 馬の骨〔語釈〕～素性の知れないことを、どこの馬の骨か分からないという。
『江戸川柳辞典』東京堂
- 5) 馬の骨～素性の知れない賤しい者。〔牛の骨〕とも。『岩波 古語辞典』
- 6) 馬の骨～身分や素性のはっきりしない者を罵って云う語。『新選 国語辞典』小学館
- 7) 馬の骨～素性の分からない人を蔑み、罵って云う語。『角川 国語中辞典』角川書店
- 8) 馬の骨～素性のわからぬ人を罵っていう称。『広辞苑』岩波書店

以上の8冊の辞典に載っている「馬の骨」の意味を探してみた。「素性や身分の分からない下賤なものを蔑み、罵って云う語」であると共通して書いている。

それでは、「馬の骨」の意味を考えながら、先の「坊主」と「館長さん」の表現に戻って、その対比の巧みさを見てみよう。「素性や身分の分からない下賤な坊主」という比喻表現を使って、知らない人への無関心、不信感、軽視を表すことによって、「館長さん」への信頼と尊敬をもっと強く表している。そのためには、どうしても「館長さん」については「赤坂の叔父の先生の建長寺の」と具体的に長く修飾する必要があったのだろう。「館長さん」との対比によって「馬の骨のような…」の表現には、比喻される人への無関心、不信感、軽視の気持ちが入る。だからこそ、そういう人には警戒心を持っていて簡単には、心を許してはならないという人間の心理も作用する。

それでは、次の例を見てみよう。

- 9) 「ナニおいらアほんの道づれで、この人がどこの馬の骨か、しりもしねえものを」
(続膝栗毛初編・十返舎一九) 『慣用句事典』

- 10) 「併しこの時は神官もおれを何処の馬の骨だかと思つたと見えて、容易には納めてくれなかつたが、十両の金子を添へて漸く(やや)納めてもらつた。所が今日ではなかなか大切に居るとかいふ事だ。(続 海舟先生 永川清話伝)」 『慣用句事典』

何処の馬の骨だかと思われて、容易に入れない本人のつらさは云うまでもないが、納める側から見ると、やはり知らない人には警戒心、又は排斥の念を抱くのも無理はないのである。そして、「何処の馬の骨…」と、下賤なものだと罵って人間を形容するということは、初対面の印象も作用するだろう。そのことがこの文によく出ている。

(4)

- 11) 「よしよしいづくの馬の骨にもせよ、形(なり)から品(ぶり)からしほたれて、みるめかひなき鬘衣(あまむすも)」 『浮世草子・元祿大平記一・二・三』

身なりと素振りが貧相に見え、それに、元気もなさそうな有様の初対面の人間への軽蔑と無視が含まれている言葉だということが分かる。次は出生の秘密に対しての軽蔑が見える資料である。

- 12) 「馬の骨

「若殿は馬の骨から御誕生」 (雑俳・柳多留一一〇)

【語釈】馬の骨=素性の知れないことを、何処の馬の骨かわからないという。

【鑑賞】御誕生とあるから身分の高い若殿だが、生母は素性も知れない妾だと嘲っている。後嗣を生んで権勢を誇っているのだろう。大名等にはまもあるし、徳川五代將軍綱吉の生母桂昌院なども馬の骨のくちである。」

『江戸川柳事典』

この資料での「馬の骨」は若殿の生母のことである。だから、素性のわからない下賤な妾、何処の馬の骨かわからない妾から生まれた若殿への軽蔑・嘲笑が伺える。その生母を馬の骨にたとえて若殿をあざける巧みさが見られる文章である。

「馬の骨」が、どういう深層喩義を持っているのか整理するために、もう少しの例を挙げよう。

- 13) 「落款(らくかん)には、牛首山人書すとあれど、何処の馬の骨の書いたのやら弁(か)らぬものなり」 当世書生氣質<坪内逍遙>三 『大辞典』

- 14) 「何処の馬の骨か知ねえが大それたのだわ言(ごと)」

歌舞伎・網模様燈籠菊桐(小猿七之助)一序幕 『大辞典』

- 15) 「おお、何処の馬の骨か」

歌舞伎・青砥稿花紅彩画(白浪五人男)一三幕 『大辞典』

- 16) 「何処の牛の骨やら馬の骨やら知れもせぬ者を抱へなされ」 『岩波 古語辞典』

- 17) 「どこの牛の骨だか馬の骨だか知れもしねえ奴」

歌舞伎・船打込橋間白波(鑄掛松)一二幕 『大辞典』

いままで、日本語の「馬の骨」という比喩表現の意味とその言葉を使う人間の心理、そ

して、それがどんな場合に使われたのかを見てきた。

まとめると、「馬の骨」は、「素性や身分のはつきりしない下賤な者を罵つていう語」である。だから、「馬の骨」の表現の深層には、それに喩えられる人への無関心と不信感、警戒心と排斥、無視と軽蔑の心理が敷かれているということが分かった。

そして、資料13)、16)、『和解』の引用文では、その人物に直接会ったかどうか、はつきりしないが、資料10)、11)、15)等の場合は、初対面でそれも、急に現われた人に喩えられたということが分かる。だが、資料9)の場合は、「ほんの道づれ」とあるから、全く知らない人ではない。「旅は道連れ世は情け」の本当の道連れにはなっていないし、互いを信じるどころか、不信感さえ抱いている間柄である。というのは、他の場合と何ら変わりはないということである。

いずれも、相手がどんな人物であって、どういう経歴を持つ者なのか知らない警戒心、不信感から、簡単に無視、軽視してしまうのに使われる喩えなのである。

韓国語の「개뼈다귀(犬の骨)」という言葉調べてみた。新韓出版社の『새국어 대사전』、물류文化社の『표준 국어 사전』等の辞典には載ってない。三省出版社の『새 우리말 큰사전』、大阪外国語大学朝鮮語研究室編の『朝鮮語大辞典』には、

<名・隠語> 悪いやつ (나쁜놈) .

と簡単に記されているだけである。だが、実際の会話とか文章の中で、「悪い奴」の意味ではほとんど使われていない。どういう風に使われているのか例をあげてみよう。

18) 「어디서 끌려온 개뼈다귀냐 (どこから転んできた犬の骨か!)」

19) 「개 뼈다귀 같은 소리 하지마 (犬の骨のようなこと言うな)」

韓国放送公社 (KBS) が1989. 8. 31に放映した「無風地帯」という番組で, 임화수 (임 77 ㅅ) が言う。

20) 「이봐, 뭐 개뼈다귀 같은 소리가 (こら、何の犬の骨のような言葉か!)」

例文18)の場合は、何処で、何をしていた、どういう者が分からない人が急に現われたとき、あざけって言う言葉である。例文19)、20)は、何人か一緒に話しをしている時、その中の一人が全然役に立たない、根拠のない話しをした場合に使われる。資料3)で、問題にしている「何処の生まれ」の意味では使われていないようだが、「어디서 끌려온 개뼈다귀냐(何処から転んできた犬の骨か)」の比喩表現にも、日本語の「何処の馬の骨」の場合と同じように警戒心、無視、排斥の心理が作用していると言えよう。

いままで述べたように、「馬の骨」と「어디서 끌려온 개뼈다귀냐 (何処から転んできた犬の骨か)」の二つの言葉は、その意味と比喩性においてほとんど変わらない。ではなぜ、日本では「馬」に喩え、韓国では「犬」に喩えたのだろうか。その共通点は、動物だということ。日本語と韓国語において、動物の馬と犬がどういうイメージを持つのか、そして、どんな比喩性を持つのかを調べてみた。

二、「馬」・「개(犬)」のイメージと比喩性

「何処の馬の骨」・「어디서 끌려온 개뼈다귀냐(何処から転んできた犬の骨か)」の比喩表現に登場する動物の「馬」と「犬」が、それぞれ日本と韓国でどういうものとして考えられ、どういう喩えに用いられているであろうか。人間と動物の長い付き合いをよく表している慣用句・諺を中心に調べてみよう。

1、慣用句・諺から見た馬のイメージ

①「馬車馬(ばしやま)」

「馬の目」

①の「馬車馬」という言葉は、脇目も振らずに物事をひた向きにすること、一途に突進することの喩えで、「馬の目」も、脇見をしないことを言う言葉である。①の諺は、役畜としての忠誠心、愚直性、推進力、すなわち、馬の力強さを表していると言えよう。

②「馬に乗るまで牛に乗れ」

「牛売って馬を買う」「牛を馬に乗り換える」

「馬に乗るまで牛に乗れ」は、足の速い馬にいきなり乗らないで、まず、鈍い牛に乗って慣れろという意から、高い地位につくには、その前に低い地位にあって努めなくてはならない。また、出世するには、段階があるという喩えである。「牛売って馬を買う」も似ている諺として、足の遅い牛を売った金で、足の速い馬を買うことで、悪いものや劣ったものから、良いもの、優れたものに取り替えることの喩えである。「牛を馬に乗り換える」も同じで、いままで手を組んできたパートナーが思わしくなくなったので、新しい別の相手とチェンジする場合に使われる。前の相手が“のろくさ”で後の相手が“俊敏”ならば、その比喩は、なかなか巧みな比喩である。これと反対の場合は、「馬を牛に乗り換える」という。

のちに、馬はスポーツとしての乗馬、牛は肉用に転換するが、これらの諺は、牛や馬が、役畜としての人間生活に欠かせない時代に作られたものであろう。万葉集の歌、四千五百首のうち八十五首がウマを詠んだもので、いずれも乗用としての馬に関するものが多いという<中川志郎『動物、(ことばの民族学2)』>。

②の諺は、馬の速さと役畜の中での位置の高さを言っているのである。

③「馬の餅」

「馬の正月」

「馬が合う」

「馬の餅」は、秋田県や青森県で、小正月に飼馬に食べさせる餅。これを食べさせると丈夫になるという。「馬の正月」は、正月、粉餅を雑煮にするなどして馬に食べさせる行事である。人間の生活において、馬はどういうものとして考えられ、そして、馬をどれほど大事にしていたか分かる。「馬が合う」は、馬とその乗り手の呼吸がぴったり合うの意から出た語だから、これも人間と馬との調和を語っているのである。

④「馬の耳に念仏」

「馬に経文(きょうもん)」

「馬に錢」

「馬耳東風」

「馬の耳に風」

「馬の耳に念仏」という諺は、「一晩ちゅう枕元で云うて聞かしたりましたんやけど、まるつきり馬の耳に念仏でんねン（『東北の風』国語大辞典から）」のように使われる。馬にありがたい念仏を聞かせても無駄であるところから、いくら言っても聞かしても聞き入れようとせず、効き目のないことの喩えである。人の世はまならぬもので、相手のためによかれと思って意見や忠告をしても全く無視され、拍子抜けしてしまうことは結構多い。

「馬の耳に念仏」は「馬耳東風」によるもので、「馬耳東風」は中国の李白の詩に見えるが「世人間此皆掉頭、有個如東風射馬耳」という文章である。「東風」は東から吹く風のことである。文章全体では「世間の人々はこれを聞くとみんな頭を振ってしまい、東風が馬の耳に吹きつけているような者もいる」と言う意味で、馬の耳がいくら春風に吹かれても動かないことから、人の意見や批評を聞き流しにすることの喩えである。

「馬に経文(きょうもん)」「馬に錢」も同じ類の諺である。無知なために、高尚なことを聞いても、物を与えられても、一向に理解できない、価値が分からないと言う様なことの喩えに用いられるのは馬だけではない。「犬に論語」「猫に小判」「牛に経文」「豚に真珠」「兎に祭文」等がある。これらはいずれも「動物」が主人公で、畜生には価値あるものの値打ちが分からないと言う発想である。

馬は農耕、運搬、乗馬、競馬などに用いられてきた力強いもの、速いものとして人間と共に生きてきたし、大事にされてきたということが、①②③から見る事が出来た。だが残念ながら、どうせ畜生であるという人間は、④のような言葉に、馬を主として利用してしまう。日本語において、馬はどのようなイメージの動物として用いられているのか、諺と慣用句を通して調べてみた。その結果、馬に対してのイメージは、曲がりなりにも、上記のように分類できた。しかし、その中で、どんなイメージが強く、どんなイメージが弱いのかは、分かりにくかった。それで、どのようなイメージが強いのか、馬に関する慣用句と諺を辞典から調査し、項目別に分類してみた。

表1) 馬に関する慣用句・諺のイメージ

項目	力、 誠実	速い、 高尚	人と調和、 宗教的	動物、無知、 蔑視	イメージと無関係				総
					馬具…	飼育	生態、生理	その他	
数	3	7	5	13	17	10	8	13	76
	15			13	48				
	28				48				

(『日本国語大辞典』小学館)

力・誠実、速い・高尚、人との調和・宗教的、と分類したのは、前の①②③のようなイメージのもので、動物だから無知、蔑視の欄は④のようなものである。が、①②③のようなものは、分類において大変難しかったし、その項目のタイトルをつけるにも無理があったため、その三つの欄を肯定的イメージと言わせてもらいたい。肯定的なイメージの慣用句・諺が15個、無知、別視等の否定的なイメージとして馬が利用されているのが13個もある。しかし、この数字がそのまま馬への人間の感情を表していると見るのは酷すぎる。イメージと無関係の欄と肯定的イメージ欄には、深い関係があるからである。馬具、飼育、生態などに関する慣用句がそれほど発達しているということは、力とスピードのある馬と人間の生活がどれほど密着していたかを示していると言えよう。

それでは、参考として韓国語の慣用句と諺において、馬はどのようなイメージの動物として登場するのか見てみよう。

表2) 馬に関する慣用句・諺のイメージ (韓国語)

区分	速い	蔑視	その他	計
数	3	1	8	12

『새 우리말 큰사전』収録の慣用句から

表1) に比べて、表2) に出ている数が少ないのは、辞典の大きさによるものである。

2、慣用句・諺から見た犬のイメージ (韓国語)

犬は韓国人の生活や感情とどういう関係をしてきたらうか。韓国語において犬はどのようなイメージを持つのか4種類の辞典(三省出版社の『새 우리말 큰사전』、신광出版社の『새국어 대사전』、을류文化社の『표준 국어 사전』、大阪外大の『朝鮮語大辞典』)から慣用句と諺を中心に調べてみた。

① 「개 꼬라지 이워서 낚지 쓴다 (犬のやり方が憎くて犬の嫌な蛸(たこ)を買う)」

- ①の諺は、嫌な人が憎くてその人の嫌がることをするという意味である。
- ②「개눈에는 똥만 보인다 (犬の目には糞だけが目につく)」－あることに感心が深くなるとそのことのみが特に目につくという意で、皮肉った言い方である。
- ③「개똥도 약에 쓰려면 없다 (犬の糞もいざ葉にしようとするとな)」－大したことのないものでも必要なときはなかなか手に入らないという諺である。
- ④「개발에 썩자 (犬の足に蹄鉄(ていつ))」－「개 귀에 방울 (犬の耳に鈴)」とも言うが、意味は日本語の「猫に小判」「豚に真珠」と同じである。
- ⑤「개 보름 쇠뿔 찬다 (犬が正月15日を過ごすみたいだ)」－犬には陰暦正月15日には餌をやらない風習(餌をやると犬に蠅がたかるし、犬がやつれるという俗説)から、祝日でも人並みに御馳走にありつけないことを言う。
- ⑥「개가 웃을 일이다 (犬が笑うことだ)」－阿呆らしくて呆れた場合に言う慣用句である。
- ⑦「개가 핥은 주사발 같다 (犬が嘗めた器みたいだ)」－きれいに食べた後の犬の入れ物ように汚れがなくて脂の乗った顔を皮肉って言う語である。
- ⑧「개 꾸짖듯 하자 (犬を叱るようだ)」－面目は少しも考えずに叱り付けることを言う。
- ⑨「개 어루(약과) 먹듯 (犬が山葡萄[薬菓]食べるように)」－犬が山葡萄、又は、薬菓(小麦粉を練り、油で揚げて蜜を付けた菓子)を味も知らずに食べるという意味で、仕事を真面目にやらないでいい加減にやることの喩え。
- ⑩「개 베풀 씹듯 (犬が蚤を噛むように)」－食べ物を食べる格好が醜い、又は、小言を繰り返して言うときの喩えである。

韓国語において犬はどういう動物として考えられ、どういう喩えに利用されてきたかは上記の通りである。どうして慣用句・諺に登場する犬のイメージがこんなに悪いのだろうかとびっくりするほどである。犬は「品の悪い、汚い、卑しい、軽視すべき、くだらない」などの喩えに用いられているのである。

表3) 慣用句・諺から見た犬のイメージ (韓国語)

区分	蔑視 品が悪い	その他	計
数	37	5	42

※参考にした資料は上記の4種類の韓国語辞典である。

韓国語から見た犬のイメージは、なぜこんなにも悪いのだろうか。慣用句と諺のほとんどは近・現代に入って作られたものではない。だとすると、韓国において犬はどういう目的として飼われてきたか、どういう付き合いをしてきたかを見たら分かる。この頃はペツ

ト、獵犬、軍用犬などいろんな目的として飼われているが、一般庶民にとって、昔はそういう目的ではなかった。珍島の珍島犬の外は、ほとんど雑種犬で番犬として飼っていた。それも頭が悪いうえ、臆病者であったため、人が近づいてくるとまず逃げながら吠える犬であった。

参考として日本語において、犬はどのようなイメージの動物として用いられているかを見てみよう。

表4) 慣用句・諺から見た犬のイメージ (日本語)

区分	卑怯 軽蔑	愛情 報恩	その他	計
数	25	2	19	46

※資料は『日本語大辞典』小学館

3、接頭語として使われる「馬」と「개 (犬)」のイメージ

高法龍の『言葉の由来』によると、「うま」の「う」は「うみ(海)」「うし(牛)」の「う」と同じで、大きく力のあるものを指して言う言葉だと言う。しかし、慣用句・諺からの調査では大きいというのは見つからなかった。それが接頭語の場合はよく出ている。

- ①馬蟬「うませみ」
- ②馬蠅「うまばえ」
- ③馬独活「うまうど」
- ④馬麦「うまむぎ」
- ⑤馬蛭「うまびる」
- ⑥馬芹「うませり」
- ⑦馬石「うまいし」

以上のように「馬」という言葉が接頭語として使われのは、動植物が多くて、同種類のもののうち大きなものを表す。これは韓国語の場合も、「말개미(馬蟬)」「말벌(馬蜂)」のように「大きい～」という意味を表す語になる。

それでは韓国語の「개(犬)」が接頭語として使われた例である。

- ①「개꿈(犬夢)」- 夢合わせする価値もない夢。
- ②「개나발(犬喇叭)」- 少しも道理に合わないとんでもないのを口にする事。
- ③「개살구(犬杏)」- 苦くて食べられない野生杏のこと。
- ④「개죽음(犬死)」
- ⑤「개망신(犬恥)」- 赤恥の意。
- ⑥「개헤엄(犬掻き)」

などのように、偽物、嘘の、野生の、品の悪い、無駄などという意味となり、卑しめ軽んじる気持ちを表す。日本語の場合も「犬侍」「犬坊主」「犬糞」「犬死」などのように使われ、その意味は変わらない。

以上のように、韓国語と日本語の接頭語としての「馬」は「大きい」、「犬」は「偽物、役に立たない、軽視すべき」という意味として使われ、ほぼ同じイメージを持っていると言える。

今まで「どこの馬の骨か」の「馬」と「어디서 끌려온 개뼈다귀냐(どこから転んできた犬の骨か)」の「犬」がどういうイメージを持つ言葉なのか、両国語の諺と慣用句、接頭語を中心に調べてきた。「馬」は力強く早い動物として人間に愛されてきた反面、価値が分からない蔑視の対象としてのイメージも強かった。「犬」の場合は、口にするのが恥ずかしくなるほど露骨的で、品の悪い、軽視すべき、くだらないものの象徴でもあるかのようなイメージと比喩性を持っていた。韓国語の場合は、「どこから転んできた犬の骨か」とか「犬の骨のようなこと言うな」のような難しい言葉は要らない。「犬」という言葉だけでもそういう極端なイメージが十分入っているからである。それでは、なぜ「骨」という言葉まで使ったのだろう。そして、日本語の場合も犬の方がもっとイメージが悪いのになぜ、馬であって、「骨」まで利用したのだろう。

「犬」と「馬」の共通点は、家畜であることだ。それで死ぬまで人間に奉仕し、愛されたりいじめられたりしてきた。もう一つ簡単に考えられるのは、日本では「馬肉」を食べていて、韓国では「犬の肉」を食べているという点である。

三、「馬」と「犬」は食用としても使われている

ところが、なぜ、ここで馬と犬が食用として利用されてきているということを調査する必要があるのかというと、「どこの馬の骨か」と「어디서 끌려온 개뼈다귀냐(どこから転んできた犬の骨か)」の語源を探るにおいて、一つの重要なカギになるからである。

「馬肉」「개고기(犬肉)」という言葉があるのは、それを食べたからであるように、「馬の骨」「개뼈다귀(犬の骨)」の言葉があるのは、食べた後の「骨」に接する機会があって、その骨がなんの骨だか分かるからではないだろうか。

1、「馬肉」

次は、夏目漱石の小説『三四郎』(p142)からの引用である。

三四郎は熊本で赤酒ばかり飲んでいて、赤酒というのは、所で出来る下等な酒である。熊本の学生はみんな赤酒を呑む。それが当然と心得ている。たまたま飲食店へ上がれば牛肉屋である。その牛肉屋の牛が馬肉かも知れないという嫌疑がある。学生は皿に盛った肉を手掴みにして、座敷の壁に叩き付ける。落ちれば牛肉で、ひっ付けば馬肉だという。まるで呪い見た様な事をしていた。

粘性があるからそういうことも考えられたかも知れない。馬肉はふつう色が桃色であるところから桜肉(さくらく)と呼ばれている。栄養の良いものは味もよく、ひれ肉などは牛肉と区別がつきにくいという。農耕を終わった夏期に畜殺することが多く、そのころが淡白で美味だと言われる。他の獣肉より、グリコーゲンに富み、蛋白質の含有量も多い馬の肉は、ソーセージなどの加工食品のほか、桜鍋(さくらなべ)と馬刺し(ばし)としても人気が高い。馬刺しは、勿論柔らかい部分を使った馬肉の刺し身のことで、桜鍋は馬肉と野菜をみそと出し汁で煮たもので、カロリーが高いので冬期に賞味されるという。

「むかし馬肉料理屋の看板には、牛は倒れていて、その上に、前の両足をあげている馬の絵が描いてあった」という(『月刊時事日語—89.7.』(韓国版))。ところが、その絵の意味は「うまかった」すなわち、「馬勝った」と「旨かった」の語呂合せだそう。

それでは、日本に馬が伝来されたのはいつのことであって、馬の肉をいつごろから食べてきたのだろうか。

「我が国(日本)では、上代から仏教の影響もあって、食用にすることを嫌ってきた。一中略一 四つの足の肉を食べなかった我が国に、牛鍋屋(今で言うスキヤキ)が誕生したのは明治元年で、…牛肉が一般家庭の台所へ入ようになったのは大正時からである」

『言葉の由来』大陸書房、高法龍

福沢諭吉が『肉食の説』を書いて明治の世に肉食を勧めたから、大いに食べ始めたのは、確かに明治からであるが、四つの足の肉を食べなかったわけではない。沢崎坦は『馬は語る』の中で、

「大国主神(おおくにぬしのかみ)に馬肉を献上したことや馬頭観音を奉ったことなどが古文書に記載されている事実から見れば、少なくとも我が国では古代から馬を飼っていたと見ることが出来るし、…食料資源として馬肉を食する習慣もあったと考えられる」と記述している。

日本人だって、もともと肉食を毛嫌いしていたわけでもない。日本の縄文時代の貝塚には、たくさんの貝殻に混じって、熊、鹿、猪、猿、狸、兎、などの骨が出土している。という事は、縄文時代には「牛・馬」等は無かったという事になるだろう。

三世紀の中国の歴史書『魏志倭人伝』に、「牛、馬、虎、羊、カササギはなく」と記述されている(『食の文化史』)というから、三世紀頃には、馬は日本にいなかったことになる。

小池清治は『日本語はいかにつくられたか』の中で、『日本書紀』を引用しながら次のように書いている。

「馬より低かった漢字の地位。文字(漢字)は馬と共に日本へ伝来された。

…応神天皇十五年（絶対年代未詳、四世紀末から五世紀初頭の頃か）、百済の国王が阿直伎（あぢき）を派遣し、良馬二匹を天皇に贈った。」

その阿直伎が日本で与えられた仕事は、馬飼の職、そして、皇太子の師になったというから、馬が貴重な動物であったことは確かである。農耕の際の動力として、また、ことに合戦の場における機動力として、その有無は時には勝負の帰趨（きすう）を決するほどの、極めて重要な戦力でもあった。だから、そのころは馬を食用とすることはなかったのである。天武天皇（たむ）は仏教を信仰するのに熱心で、飛鳥に即位して四年目（たむ）に、

＜今日からは漁や狩をしてはならない。わなや落とし穴を作ってはならない。牛、馬、犬、猿、鶏の肉を食べてはならない。もしそむくものがあつたら罰する＞

大塚滋、『食の文化史』p7.

という「肉食禁止令」を出した。これから見るとそれまで日本人は大いに牛、馬、犬、猿、鶏などの肉を食べていたことになる。肉食禁止令が出てから約千年後の幕末まで続いて、文明開化とともに肉屋も出現するようになったわけである。

2、「개장국（犬肉の煮込み汁）」

韓国の固有の食べ物として、狗醬、地洋湯、補身湯とも言われるが、犬の肉を葱、生姜、にんにく、唐辛子粉などを入れ、肉が柔らかくなるまで煮込んだものである。

これで汗を流し、暑気を払い、虚弱を補う。それゆえ、専門の料理屋も裏通りには多いのである。『史記』に「秦徳公二年に初めて三伏の祭祀を行なうにあたって、城内の四大門で犬を殺し、虫害を封じた」とある。それゆえ犬を殺すのは三伏の昔の行事であり、今日も、狗醬が三伏のもっとも良い食べ物とされている。

3、外的側面

韓国のいわゆる「補身湯」が時々、外国のマスコミで話題になったりした。1988年ソウルオリンピック大会組織委員会の言語サービス分科委では、通訳案内要員に外国人から「補身湯」に関して質問されたら、どういうふうに答えるかについても教育したという。

それでは、犬の肉を食用にする国はどれ位あるだろうか。「縣羊頭売狗肉」とか「狡兎死走狗烹（兎狩が済むと不用になった獵犬を煮て食べる）」という表現を持つ中国、夏の補身用で食べる韓国、そしてポリネシア、北アメリカの七五の文化圏（『食と文化の謎』マーヴィン・ハリス著、板橋作美訳、岩波書店）などである。

ちなみに、馬を食べる国は、カロリーの低い美容食として定評の高いフランス、「縣牛首、売馬肉」の言葉のある中国、日本、ベルギー、オランダ、ドイツ、イタリア、ポーランド、ロシアなどである。

韓国も犬を食べるということで、外国から非難を浴びせられたりしたが、日本も動物の扱いが残酷だから(犬や猫を、扱いに困ったり不用になったりすると捨てる習慣)とあって、外国で騒いだりしたことがある。現在のイギリス人は犬と並んで馬を人間の友達と考えているらしい。だから犬の肉と馬の肉は、人間が食べるものの中に入っていないのだ。それに馬と犬は食べてはいけないという法律がある。食習慣は、自分のと違っているというだけの理由で、馬鹿にしたり非難すべきものではないと人類学者達は言う。

不用な犬を捨てるほうが残酷なのか、それとも一思いに打ち殺すほうが残酷なのか、犬の肉は食用にすべきか否かといった問題は、論だけが有り得て証拠を出せない問題なのだ。判断を下す人の特定の動物観、人間観、延ては宇宙観を前提として、初めて結論が出てくる。従って究極的には主観的、相対的な解釈の域を出ることは出来ないのである。こういう諸問題に関してもっと詳しい内容は、『食と文化の謎』と鈴木孝夫の『言葉と文化』『言葉と社会』等の本を読んでいただければと思う。

III. まとめ

日本語の「どこの馬の骨か」と韓国語の「어디서 왔든 개뼈다귀야 (どこから転んできた犬の骨か)」という慣用的比喩表現がどういう共通性と相違性を持っているのかを調査するために、まず、両国語における「馬」と「犬」はどのようなイメージと比喩性を持つのか調べてみた。その比喩表現は「馬」と「犬」という言葉のイメージとも関わりを持っているが、それだけで生まれたものではないようだ。その裏には文化的背景の差がある。日本では「馬肉」を食べるから「馬の骨」という言葉が生まれ、韓国では「犬の肉」を食べるから「개뼈다귀 (犬の骨)」という言葉が生じてきたのである。

人間は何かを食べるときは美味しいと思って食べるが、その後に残るものには、あまり興味を持たない。「馬の骨」も「犬の骨」も、実際人間が食用として使って残った物である。偶然目についたその骨に卑しさを感じたのだろうか。

「馬(牛)の骨」の語源ははっきりしないが、昭和出版社の『暮らしの中の語源事典』では、

〔意味〕 素性の分からない人のことを罵って言うこと。同様な意味で(牛の骨)とも。

〔語源〕 文字通り牛馬の骨の意味で、牛馬の骨は名も刻まれずに捨てられることから来たものと推測されるが詳らかでない、とある。

人間の因果は始源から動物と深い縁に結ばれている。無類の単純な比喩から始まって、極言概念に至るまで、動物は人間に対峙客体として、あるいは醜い人間の鏡として、利用されてきた。動物はおおむね怠惰・惨忍・肉欲・背徳・物臭・無知、そのほか思い付く限りの悪行醜行の象徴になっている。可愛そうな動物達である。

人の真似をすれば「猿真似」、へまばかりしてぬけていれば「頓馬」と罵られ、「猫ばば」が見つけれられると「馬脚」を現したことになる、むかし卑怯な武士は「犬侍」と罵られ、役立たずに無駄に死ぬば「犬死に」である。人の後について面白半分に騒げば忽ち「彌次馬(やじうま)」になり、人の意見を聞き流せば「馬耳東風・馬の耳に念仏」、素性の知れない、つまらない人間は「馬の骨」である。過剰とも思えるこういう比喻を否定すれば、言葉は索漠たる風景になってしまうだろう。莫大な情緒の重荷を私達は動物達に依存しているのである。

動物にも特に痛罵されるものと、美称に利用されるものがある。前者の代表は馬と犬であろう。しかし、「畜生」と罵られるのは犬ではなくむしろ人間である。馬を愚かな動物と見なすのも間違っている。「馬に馬鹿はなくて人に馬鹿あり」という諺が示しているように、人間の中にこそ愚かな者がいるという事を忘れてはならない。

IV. 参考文献

- | | | | |
|--------------------------|---------|--------|--------------|
| 1. 『日本国語大辞典』 | | 小学館 | 1974. 9. |
| 2. 『世界大百科事典 2. 3. 』 | | 平凡社 | 1955. |
| 3. 『慣用句辞典』 | | | |
| 4. 『江戸川柳辞典』 | 浜田義一郎 | 東京堂出版 | 1977. |
| 5. 『岩波古語辞典』 | | 岩波書店 | 1982. |
| 6. 『広辞苑』 | 新村出 | 岩波書店 | 1988. 10. |
| 7. 『角川国語辞典』 | | 角川書店 | 1978. 1. |
| 8. 『新選国語辞典』 | | 小学館 | 1961. |
| 9. 『比喻表現辞典』 | 中村明 | 角川書店 | 1979. 4版 |
| 10. 『国語語源辞典』 | 山中襄太 | 校倉書房 | |
| 11. 『隠語辞典』 | | 東京堂出版 | |
| 12. 『朝鮮語大辞典』 | 大阪外国語大学 | 角川書店 | |
| 13. 『용어 세계 대백과사전』 | | 東亜出版社 | 1984. 6. 30. |
| 14. 『세국어 사전』 | 양주동 | 신화出版社 | 1973. |
| 15. 『日韓大辞典』 | | 学園社 | 1977. |
| 16. 『씨우리말 큰사전』 | 신기철·신용철 | 三省出版社 | 1986. |
| 17. 『표준국어사전』 | | 을류文化社 | |
| 18. 『月刊時事日語』 | | 時事日本語社 | 1989. 7. |
| 19. 外山滋比古 『ことばの習俗』 | | 三省堂 | 1979. |
| 20. 外山滋比古・平田純 訳『ことばの世界Ⅱ』 | | 講談社 | 1979. |

21. 川崎真治 『日本語の謎を解く』 読売新聞社 1974.
22. 小池清治 『日本語はいかに作られたか』 筑摩書房 1989. 5. 30.
23. 岩淵悦太郎 『語源のたのしみ(-)』 毎日新聞社 1970.
24. 松野道男 『ことわざの文化人類学』 研究社 1985.
25. 金田一春彦 『ことばの由来』 講談社 1978.
26. 高法龍 『言葉の由来』 大陸書房 1975.
27. 沢崎坦 『馬は語る』 岩波新書 1987.
28. 鈴木孝夫 『ことばと文化』 岩波新書 1990.
29. 鈴木孝夫 『ことばの社会』 中央公論社 1975.
30. 白石大二 『日本語の発想』 東京堂出版 1971.
31. 故事諺研究会 『暮らしの中の語源辞典』 昭和出版社
32. 板橋作美 訳 『食と文化の謎』 岩波書店 1989. 11.
33. 大塚滋 『食の文化史』 中央公論社 1975.
34. 中川志郎 『動物(ことばの語源2)』 創拓社 1988.
35. 築波常治 『米食・肉食の文明』 日本放送出版 1977.
36. 吉田正俊 「動物・妖怪による慣用表現」 『言語』大修館書店 1989. 2. 1.
37. 磯部真理 『「食」故事・諺辞典』 大和書房
38. 夏目漱石 『三四郎』 p 142
39. 志賀直哉 『和解』 p 51~52